特251
978

始

特251
878

佐賀縣總務部統計課編

佐賀縣案内

五・二六・一九
佐賀縣

目次

(一) はしがき

沿革……一
位置……一
地勢……二
土地……三
氣候……三
戸口……三
交通……四

鐵道 道路 河川 港灣 諸車

(二) 産業

概況……六

農業……七
耕地面積　農家戸數　米　麥　雜穀豆類　果實及蔬菜　其の他
蠶絲業……八
畜産業……九
林業……一〇
鑛業……一〇
水産業……一一
工業……一二
概況　清酒　陶磁器　寶藥　鐵器類　藁製品　麵類　和紙　麥粉
商業……一五
1 金融——銀行　郵便貯金　産業組合
2 會社
3 物品輸移出入
産業機關……一八
農事試驗場　穀物檢査所　水産試驗場　蠶業取締所　繭檢定所
養蠶試驗場　賣藥研究所　種畜場　窯業試驗場　商工奬勵館
各種團体……一九
農會　農業倉庫　養蠶組合　畜産組合　山林會
水産會及漁業組合　佐賀商工會議所　唐津商工會議所

(三) 縣治

行政區劃……二一
地方自治……二二
縣會　市町村
教育……二三
初等教育　中等教育　補習教育　社會教育
神社及寺院……二三
社會事業……二四

警　察……二四
警察署　犯罪　火災及消防組
衛　生……二五
急性法定傳染病　トラホーム　花柳病　上水道
財　政……二六
縣財政　市町村財政　租税負擔額

(四) 遊覽案内

1 佐賀市を中心として

佐　賀　市……二八
佐嘉神社……二九
佐賀城址……二九
神野公園……三〇
蓮池公園……三〇
川上の景勝……三一
熊の川溫泉……三三
古湯溫泉……三三
基肄城址……三四
日の隈山……三四
多久聖廟……三五
櫻岡公園……三五
清水瀧……三六
牛尾の梅林……三六

2 唐津市を中心として

唐　津　市……三七
舞鶴公園……三七
西の濱海水浴場……三八
虹の松原……三九

領巾振山……四〇
七つ釜……四一
名護屋城址……四二
呼子址……四三
田島神社……四四
假屋灣……四五

3 武雄町を中心として

武雄温泉……四六
櫻山公園……四七
御船山……四八
黒髪山……四九
有田町……五〇
伊萬里町……五一
七つ島……五二
嬉野温泉……五三
鹿島町……五四
旭ヶ岡公園……五五
祐徳稲荷神社……五六
多良嶽……五七

縣廳

(一) はしがき

沿革

本縣はもと、佐賀、蓮池、小城、鹿島、唐津及對州嚴原の六藩に分れてゐたが明治四年の廢藩置縣によつて各藩に縣を置かれた。以後數度の廢置分合がくりかへされたが明治十六年佐賀縣を佐賀郡佐賀に再置し、肥前の國の內佐賀、神埼、基肄、養父、三根、小埼、東松浦、西松浦、杵島、藤津、の十郡を其の所轄とし、同二十二年佐賀に市制を布き、同二十九年基肄、養父、三根の三郡を合併して三養基郡とし、越えて昭和七年唐津町に市制を布き爾來二市八郡を管轄して今日に至つてゐる。

位置

本縣は我國に於ける比較的南方に位し、北九州文化圏の一

部に入り、東北に北九州工業地帶を控へ西は有數の貿易港長崎に通じて中華民國に對し、なほ貿易港唐津の滿鮮に對する新航路の開設と共に益々卓越した位置を占めることゝなつた。且つ北に玄海灘の豊漁地帶、南には產業、經濟、文化の一大中心地たる佐賀平野を擁し、位置の優越さを益々大ならしめ、本縣民の發展方向を規定してゐる。

地　勢

縣の北部及西部は山嶽が連亙してゐるけれども著しい高山峻嶺はなく、その最高のものと雖も一千米余に過ぎない。河川は佐賀福岡兩縣の自然的境界線をなす筑後川をはじめ、有明海に入るものに八田江川、嘉瀬川、牛津川、六角川、櫨田川があり、松浦灣に注ぐものに松浦川、玉島川がある。縣の東南部は所謂筑紫の大平野であつて、農產豊かである。

佐賀市全景

土　地

土地の總面積は十八萬九千町歩で、內國有地二萬四千町歩、民有地十六萬五千町歩である。之を地目別に見ると、田五萬四千町歩、畑一萬九千町歩、山林六萬一千町歩（國有地を含む以下同じ）原野四萬一千町歩、其の他一萬四千町歩で、其の割合は田が二割九分、畑一割、山林三割二分、原野二割二分、其の他七分に當る。

氣　候

氣候は概ね溫和で、每年の平均氣溫は山間部の約十四度から、海岸地方の約十六度の間にある。既往に於ける最高記錄は三十七度七で最低は零下六度五である。降雪は北部山間地方には屢々あるが、平坦地では殆どない。降雨の累年平均は千七百粍內外で、全國のほゞ中位にある。一般に秋から冬に少く春から漸次增量して、六七月の候に最も多い。

戶　口

昭和十年十月一日現在の國勢調査に依る戶數は十二萬八千戶、人口六十八萬六千人で、前回昭和五年の國勢調査に比し戶數に於て一千戶、人口に於て五千餘人を減少した。而して每年の人口自然增加數（出生より死亡を差引きたる數）は約九千人の多きに拘らず、前五ヶ年間に現在人口に於て斯の如き減少を見たのは炭坑の廢止縮少に因る一部地方の人口激減に主因を有すると言ふべきだが由來本縣

は毎年出稼者多く、入寄留者の少いといふ一般的傾向に基因するものである。從つて男女の權衡も女百人に對して男九十四人に當り女子の超過を示してゐる。人口密度は一平方粁當二百八十人に達し郡市別に見たる最少小城郡の百九十二人すら全國平均百八十一人よりも尙多い。昭和九年中の人口千に對する婚姻の割合は八・四八件、離婚が〇・七五件、出生三一・五二人、死產一・三二、死亡一九・五二人に當り全國に於ける順位は出生第十九位死亡は第十七位の高位にある。

交　通

鐵道　省線長崎本線が鹿兒島本線と鳥栖驛で分れて東北より西南に縱貫し、之に配するに佐世保、唐津、伊萬里、佐賀の各線がある。その延長二百十四粁。外に私設、北九州鐵道、川上肥筑の軌道がある。

道路　國道四線百二十一粁、縣道百三十五線千六十六粁合計百三十九線、一千百八十七粁である。近時自動車の發達著しく國縣道にして自動車の通ぜざるなしの狀態にあるが、從つて道

鳥栖驛

路の改修を要する箇所が多くなつたので、經費一千二百六十萬圓を以て昭和四年より十箇年の經續事業として重要道路の改修を計畫し目下一部施行中である。

河川　河川法を施行及準用する河川は九十四川、其の延長六百三十粁に及び、下流に於ては舟行の便あるものも少くないが、概ね屈曲多く兩岸の土地地盤低きにすぎて洪水の爲屢々慘害を蒙る事がある。治水策として植林の普及、河川の改修等に意を用ひ目下改修中或は改修計畫中のものが二、三ある。

港灣　重要港灣として伊萬里港、貿易港として唐津、住ノ江の二港、指定港に諸富、呼子の二港がある。伊萬里港は港內水深く且つ灣くして四時風波の憂なき天然の良港であり、唐津港は滿鮮聯絡上地の利を占め、外國航路線の要路に近く石炭の輸出港として知られ、何れも商港、漁港として有望な港灣であるが、人工的施設に尙不備の点があり、船舶の碇繫に不便があるので、唐津港に對し昭和七年より四ケ年經續事業として五十五萬八千圓を投じ目下築港工事進行中である。

諸車　荷馬車數は三千輛、荷車二萬四千輛、自轉車七萬一千臺、自動車一千臺であるが、自動車と自轉車は年々增加し、荷馬車、荷車は漸減の傾向にある。が本縣に於ては荷車、荷馬車何れも增加した。

(二) 産業

概況

本縣は氣候溫和にして、雨量多く土地肥沃で、農耕に適し、佐賀平野をはじめ濱崎、唐津の平坦地及伊萬里平野、鹿島平野は諸河川に依つて米作灌漑耕作地帶を形成し、その他低い丘陵部或は臺地は多く畑作地に利用せられ農業縣としての面目を發揮してゐる。然しながら、舊藩時代よりの尙武思想は他面經濟思想に疎ききらひを招致して、商工業の發達は未だしの感がある。

昭和九年の生産額は約一億八百萬圓でその內譯は次の通りである。

農産	五〇、一三三、二四七圓	(四六、四%)
蠶絲	七、〇〇六、九七六圓	(六、五%)
畜産	二、一六一、〇七〇圓	(二、〇%)
林産	一、三〇六、六六六圓	(一、二%)
鑛産	五、八一九、〇九三圓	(五、四%)
水産	三、九八七、二七〇圓	(三、七%)
工産	三七、七〇〇、〇四〇圓	(三四、八%)
計	一〇八、一一四、三六二圓	(一〇〇、〇%)
一戶當生産額		八八二圓
一人當生産額		一五七圓

農業

耕地面積 は七萬二千町歩で、全面積の三割八分に當り、特に田の割合の多いこと全國に比類少く然も地味は頗る肥沃である。更に地質良好、海波靜かなる有明海を干拓して耕地の大擴張を行つてゐる。目下工事中のもの干七百六十一町歩、見込地實に三千町歩に達する。內縣營として一千百七十五町歩を選定し工費四百萬圓を以て昭和七年度より八ヶ年の經續事業として目下工事中である。

農家戶數 は六萬七千戶で全戶數の五割五分を占め一戶當耕地は一町一反歩である。

農産物 の總額は五千百三十三萬圓で、各種生産額の第一位を占め、縣下全生産額の四割六分の多きに當る。從て縣は農業の改良發達には特に意を用ひ、近時農村の不況打開の爲特に裏作の利用、副業の奬勵、自給費の施用等の方策を講じ或は産業組合の活動を助長して、團体的統制を圖り、或は金融の道を開き、更に匡救事業を起して積極的に農村救濟の方途に專念しつゝある。

米 は本縣物産中の大宗である。從來年々百三十萬石內外を産し、縣外に五十萬石を移出するの盛

有明海干拓事業

況にあつたが、昭和八年に於ては更に一躍實に百五十一萬一千石といふ未曾有の數字を示すに至り昭和十年の全國的兇作の年に於ても尚百三十一萬石を示した。價額三千八百十七萬圓。

麥 米に次ぐ主要農產物である麥は昭和十年には三十九萬石を產し、近時政府の小麥增產計畫と縣の奬勵と相俟つて漸次增產の傾向にある。

雜穀豆類 近時價格の下落と果樹園藝の發達及桑園の擴張等に因り年々減少しつゝある。

果實及蔬菜 本縣の果樹園藝は概して振はざるの感があつたが農業經營の合理化に伴つて、漸次發展の氣運に向ひ、唐津のキウリ、嚴木玉島の密柑、納所のビワ、佐賀郡北部の干柿等は其の品質優良で市場の賞讃を博し年々縣外に移出しつゝある。昭和九年に於ける生產額は蔬菜二百六十萬圓、果實百十萬圓である。

其の他 主なるものをあげると甘藷の五十六萬圓、菜種七十七萬圓、製茶十七萬圓、楮八萬八千圓、花百合五萬八千圓等である。

蠶絲業

本縣の養蠶業は大正三四年頃迄は僅かに繭產額十萬貫に過ぎなかつたが、世界大戰後繭糸價暴騰の氣運に乘じ、縣の幾多の施設計畫に助長されて漸次活況を呈し、延いては三大製絲工場の設立を見、近年著しき進展を示し、縣下の重要產業たるの地位を占むるに至つた。近時繭價の騰落常なく、喜憂交々至るの現狀であるが、縣は多年の要望たる蠶業試驗場を設置し、又繭檢定所を設け、鋭意蠶糸業の改良發達、取引の公正に努めてゐる。昭和十年の繭產額は七十三萬六千貫、價額三百三十九萬圓。昭和九年の生糸產額八萬七千貫、價額四百二十一萬圓。

畜產業

本縣の畜產業は近時著しく發達して來たが未だ先進地に比して遜色なしとはいへない。故に縣に於ても之れが啓發には絕えず留意する所であつて、優良種畜の購入及生產、犢駒の保存、畜產品評會並講習會の開設、畜產組合の設置等に努めてゐる結果、漸次効果を擧げ、東松浦郡の役牛、西松浦郡の乳牛、東平坦部の育馬多良村の養豚等その成績は良好である。

神野公園

昭和九年末

牛	二三、〇二九頭
馬	一七、七〇八
豚	三、〇四三
鶏	六九七、四七二羽
鶩	四、七七〇

で畜産總額は二百十六萬圓、總生産額の二分に當る。

林業

民有林の面積は、五萬九千町歩、原野二萬七千町歩で、既往の趨勢を見るに原野は減少し森林面積は增加するの傾向にある。これは造林奬勵に關する不斷の努力と縣民の森林思想の向上とによるもので國土保安上喜ぶべき現象であるが尙原野の內一萬數千町歩に對しては造林の餘地がある。昭和九年に於ける林產物總價額は百三十一萬圓に過ぎない。これは往年に森林の濫伐があり、植林事業の發達も年尙淺く、其の林相未だ伐採樹齡に達せざるものが多いのと、價格の下落に依る伐採の手控へに依るものゝやうである。

鑛業

東松浦郡松浦川流域、杵島郡の中部及小城、西松浦郡の一部には豊富なる炭田を有し、其の炭質も概して良好であるから戰時好況時代には販路も擴大し、大いに活況を呈したのであるが、其の後の反動によつて中小炭坑は殆ど休止し、先年より更に相知の重要炭山の閉坑を見たる結果現在では高取、貝島、村井等の經營する十數坑を數ふるの狀態である。從つて出炭も亦減じたが其の產額は米に次ぎ昭和九年に於いて七十五萬噸、價額五百四十二萬圓に達し、其の約八割は縣外に輸送しつつある。

水產業

本縣は北西玄海に臨み東南有明海に面し海岸線の延長七十四里、沿海市町村數三十八で總町村數の三割に當り有望なる漁場多く殊に壹岐、對島及朝鮮海等の大漁場を控ふるに拘らず、水產總價額に於て或は一戶當り價額に於て他縣に比し尙遜色のあるのは、畢境遠洋漁業の振はざるに原因する。

杵島炭坑

縣に於ては特に此の方面に留意し當業者も亦沿岸魚族の遷減につれて動力漁船を以て沖合及遠洋漁業に從事するもの年々增加してゐる。又沿岸魚族の濫獲を戒め監視船を新造し密漁船の跳梁に備ふる等之れの保護に努めてゐる。玄海に於ける重なる魚族は鯛、鰮、鰺、鰤、イカ、鯨等で有明海には牡蠣、蜊、赤貝、蟶等貝類の養殖及ムツゴロ、海苔、シヤコ等の珍奇なる特殊水産物を産する。

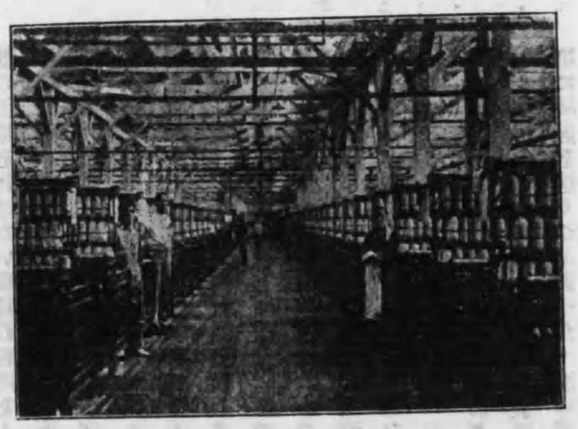
又陸地には用水池濠、灌漑水路が極めて多いので鯉、鮒鰌等の淡水養殖の適地多く相當の成績をあげてゐる。

昭和九年の水産物総價額は三百九十八萬七千圓で、內漁獲物三百九萬六千萬圓、製造物八十九萬一千圓で前年に比し七萬七千圓の減少を見たのは旱害に因る鰡の廻遊の少なかつた爲のやうである。

工　業

概況　昭和九年末の工業戸數は[illegible]萬四千九百戸、五人以上を使用する工場數四百十八で、工産物総

漁業取締船



紡績工場

額は三千七百七十萬圓に達し、其の産額農産に次ぎ新興の氣運にあるが或る數種の代表的のものを除いては其の發達遲々たるものがある。近時官民一致して鋭意經營の改善、品質の向上、販路の開拓に努めてゐる。就中販路の開拓に就ては從來遺憾の点があつたのに鑑みて特に力を注ぎ、大連に駐在員を置き販賣斡旋をなし或は見本市を開催する等縣產品の宣傳に努め特に滿鮮方面には多大の期待を以て進出を圖りつゝある。

清酒　工產品の首位を占め品質の優良なる事灘五郷を凌ぎ而も價格低廉なる爲め年と共に縣外に進出し其の額年々四、五萬石を算してゐる。昭和九年の釀造高、八萬五千石、價額五百七十四萬圓。

陶磁器　本縣に於ける陶磁器の起源は遠く奈良朝時代に其の源を有し降つて唐津物の名はいつしか陶磁器の代名詞となつて、爾來幾多の變遷を經て現今に及んでゐる。古來より名聲高き伊萬里燒（現今の有田燒）は

純白淡麗品質硬堅で美術品、裝飾品、飲食器等凡て精巧にして他の追隨を許さない獨特の長所をもつてゐるが價格の關係と嗜好の變遷に幾分副はない憾があつたので縣に於ては之れが改善を圖る爲窯業試驗場を設け其の研究指導に當り意匠圖案にも力を注いだ結果近時著しく面目を改めつゝある。昭和九年の製造場二百三十七、生產價額二百八十七萬圓。

賣藥 近時長足の發展をなし其の產額年額二百五十七萬圓で、所謂配置賣藥として富山縣の次位にある。就中田代の寶藥、鹿島の膏藥は其の代表的のもので販路は內地各縣は勿論朝鮮、臺灣等に及び近時は滿洲、上海、南洋等にも著しく進出しつゝあるが縣に於ても賣藥研究所を設けて之れが研究指導を爲してゐる。

鐵器類 本縣の鐵器類は維新前より夙に著しき發達を遂げ嘉永年間には兵器、車臺等を幕府に納付した歷史を有してゐるが其の後衰微し、世界大戰當時に相當活況を呈したが、戰後の不況に依つて次第に減退を辿りつゝあつた。近時軍需工業の活躍に伴つて漸次產額增加の傾向に轉じ、昭和九年に於

陶器工場

ては四百三十八萬圓に達し戶上の配電盤、唐津鐵工所の工作機械、眞崎の製麵機等は何れも獨特の製品として聲價が高い。

藁製品 は農家の副業として平坦地方に生產せらゝるものがあるが、又近時は企業的に經營するものをも生じ品質も向上し年產額八十六萬圓を算し、縣外移出も次第に增加しつゝある現狀に鑑みて縣に於てもこれが檢査を行ひ品質の向上と規格の統一を期してゐる。

麵類 本縣の麵類は往時は家內工業的手製ばかりであつたが、本縣に眞崎製麵機の發明せらるゝに及んで、漸次機械製に壓倒せられるの情勢を示した。近時又手製獨得の長所を賞せられて著しく擡頭し來り、機械製と共に本縣重要物產の一として年產額六十一萬圓を算す。

和紙 近時は機械製紙の產額も少くはないが、多くは手漉で農家の副業として山間地方に產し、就中唐津の小判紙(姫紙)、名尾の障子紙等は九州各縣及京阪、朝鮮等に移出し好評を博してゐる。年產額八十三萬圓。縣は此の重要物產の發達助長に努め特に產業協會に專任職員を設置し、經營の改善品質の向上を圖ると共に一面販路の開拓に努めてゐる。

麥粉 水車製粉は縣下各地に散在するが生產額の大部分は三養基郡內の機械製粉が占めてゐる。昭和九年に於ける生產額は五百三十五萬貫、價額三百十一萬圓。

商業

金　融

銀　行　縣下に本店を有する銀行數は十五行で其の公稱資本金一千六百二十八萬圓、拂込額七百六十三萬圓である。由來本縣は小銀行分立し一時三十九行にも及んだことがあるが漸次合併せられて今日に至つた。昭和九年末現在の預金總額は五千四百九十萬圓。貸付金四千十六萬圓。

郵便貯金　昭和八年末現在高は一千六百五十九萬圓の多きに達し、之を既往と比較すると大正十四年頃迄は五百萬圓臺に過ぎなかつたが、其の後に於ける金融恐慌以來急速度を以て增加した。

產業組合　產業組合數は百六十六、組合員七萬九千五百人で就中信用組合の發達著しく、目下組合數百五十二、貯金二千四百十五萬圓、貸付金一千八百十一萬圓の多きに達し、農村の金融機關として極めて重要の任務に有し、又農村更生計畫の實行に伴つて產業組合の活動に俟つこと極めて大なるものあるに鑑みて、之れが指導監督には特に意を用ひて堅實なる發達を助長しつゝある。

會　社

縣下の會社數は三百七十九、其の公稱資本金五千六百二十五萬圓、拂込資本金三千九百七十二萬圓、積立金五百五十萬圓で前年に比し社數十九、資本金に於て十九萬圓を增加した。之を事業別に見ると商業の二百十三首位を占め、工業之に次いで百二十二、交通業三十七の順位であつて其の他は著しく少なく鑛業三、農業三、水產業一である。

物品輸移出入

本縣は貿易港として唐津、住ノ江の二港を有してゐるが、これらは主として石炭の輸出港で、物資の需給は殆ど九州各縣及京阪等の內地取引であつて、海外取引としては大したものではなかつたので縣に於ても內地取引の發展を圖ると共に一方滿鮮及上海、南洋等への進出に努めてゐる。

昭和九年に於ける縣外物品輸移出入推計總額は九千萬圓で、內

輸移出　五千九百萬圓　　輸移入　三千一百萬圓

で差引二千八百萬圓の輸移出超過を示してゐる。

輸移出品の內譯を示すと

首位は、米の二千九十萬圓で總額の三六％に當り、以下清酒六百四十萬圓、石炭五百二十萬圓、綿糸三百九十萬圓、生糸三百四十萬圓、陶磁器三百四十萬圓、鐵器類二百五十萬圓等である

輸移入品の內譯は

綿花	三百萬圓	小麥	二百十萬圓
書籍類	百三十萬圓	生魚	百三十萬圓
砂糖	百三十萬圓	肥料	百四十萬圓

等である。

産業機關

農事試驗場　本場を佐賀市神野町に、園藝試驗場を佐賀郡春日村に設置して農業技術の研究、指導優良種苗の配布、農業技術員の練習養成等の事業に努めつゝある。

穀物檢査所　移出米の聲價を發揚する爲、穀物檢査所を縣廳内に置き、管内に八ヶ所の支所及須要地に檢査員を配置し、嚴正なる檢査を勵行し、又縣民の希望により希望檢査を行ひ、品質の向上に貢獻しつゝある。

水産試驗場　本場を縣廳構内に、松浦海出張所（魚撈部）を唐津市に、有明海出張所（鹹水養殖部）を藤津郡濱町に淡水養殖部を佐賀郡高木瀬村に、製造部を本場に置く。各部夫々水産業の發達助長に努めつゝある。

蠶業取締所　蠶種製造又販賣の取締、蠶種の檢査及蠶病豫防驅除等に努めてゐる。

繭檢定所　繭の品位保持の爲、嚴正なる檢査をなし進んで、繭格付を行ひ、取引の公正と繭質の向上を圖りつゝある。

養蠶試驗場　原蠶種の製造、技術員の養成、養蠶に關する試驗研究及調査を行つてゐる。

賣藥研究所　賣藥は簡易醫療方法として廣く民衆に利用せらるゝ所であつて、其の内容の如何は保

健衛生上極めて重大問題であると共に、一面輸移出品としても亦重きを爲してゐるので、原料内容の充實と商品價値の聲價を高むべく研究指導に當つてゐる。

種畜場　品種の向上と生産の增加を圖る爲昭和八年縣營として設置した、

窯業試驗場　陶磁器製造の研究指導機關としてその設立は久しく熱望された所であつたが、昭和三年第一窯業試驗場を西松浦郡有田町に、昭和五年第二窯業試驗場を藤津郡嬉田町に設立し、鋭意斯業の發達改善に努めてゐる。

商工奬勵館　昭和六年佐賀縣商品陳列所を佐賀縣商工奬勵館と改稱し、縣物産の改良、販路の擴張を圖り縣産業の振興を期する爲、物産の販賣斡旋、宣傳試賣、商取引の紹介、商品の陳列等各種の事業を行つてゐる。

各種團体

農會　縣農會は明治二十九年の創立に係り、事務所を元佐賀郡役所跡に置く。實行機關として各級農會及町村農會奬勵の下に成立せる農事實行組合、出荷組合を有す。昭和九年に於ける經費豫算總額は縣農會七萬七千圓、郡農會十九萬五千圓、町村農會五十四萬七千圓である。

農業倉庫　大正六年農業倉庫奬勵規定を發布以來之れが設立增加し、昭和九年末現在に於ける倉庫數百六十四棟、此の建坪一萬四千六百坪、收容力玄米八十三萬七千俵に達す。

養蠶組合　大正十二年養蠶組合奬勵規程を訪け、各郡農會をして之れが設置並活動に努めたる結果その成績良好となり、昭和九年に於ては組合數百六十四、組合人員二萬八千七百人に達した。

畜産組合　畜産事業を助長せしむる機關として郡を區域とする組合七、郡市を區域とする組合一、及畜産組合聯合會一がある。

山林會　縣山林會は大正十二年に始めて縣林政の補助機關として設立せられ、爾來講習、講演會の開催、造林品評會、實地指導、林業功勞者の表彰等林業の發達助長に努めつゝある。

水産會及漁業組合　水産業の收良發達に關する事業を行ふ爲縣水産會及郡水産會があり、又漁業組合は漁業權若くは入漁權を取得し、又は漁業權の貸付を受け組合員の共同施設をなし、組合員の福利を增進し漁業の發達を期してゐる。その數五十六。

佐賀商工會議所　佐賀市運池町にある。議員三十名、選擧人員五百五十九名、被選擧人員四百八十一名で、昭和八年度決算額は八千八百八十三圓である。

唐津商工會議所　昭和九年八月設立認可せられ目下議員數二十五人、選擧人員三百三十人。

(三)　縣　治

本縣は二市八郡を管轄し、縣廳を佐賀市赤松町に置く。縣廳は知事官房、總務部五課、經濟部六課學務部三課、警察部七課に分れ夫々主管事務を分掌す。

行政區劃は

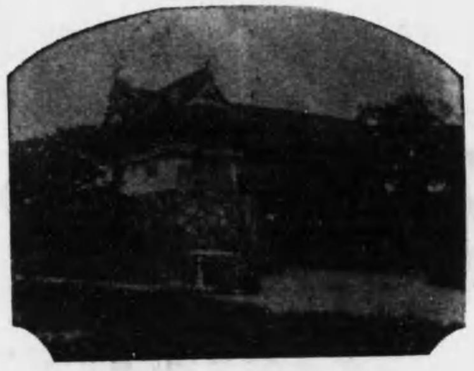
	面積（平方キロ）	人口（昭和十年十月一日現在）
佐賀市	九・一三	五〇、一五四
唐津市	二九・〇九	三一、〇五九
佐賀郡	二四五・六八	九一、四三七
神埼郡	二一〇・〇〇	四三、六五三
三養基郡	一五八・八九	六一、六三九
小城郡	三二二・四七	六〇、四六二
東松浦郡	四九一・九八	九八、九六四
西松浦郡	三四三・二五	七一、一六四

杵島郡	三二〇・五五	一〇九、一二一
藤津郡	三一二・八五	六八、四六三
計	二、四四三・八九	六八六、一一六

地方自治

縣會議員定數三十人、參事會員十人、昭和八年末現在の選擧有權者は十三萬三千九百五十三人である。

市町村 市が二、町が十八、村が百五で、市町村長百二十五人市町村會議員千八百四十人である。



佐嘉城址

教育

舊藩時代より教育には力を注ぎ天明元年(百四十餘年前)には早くも弘道館の設置があり、維新前後には英主閑叟公大に西洋文化を輸入し文學、兵學、醫學等子弟の教養に意を用ひられた爲、維新の際に幾多の名士を出したる歴史を有してゐる。由來官民共教育に對しては理解多く初等教育より中等教育に至るまで時勢の進運に伴ひ、鋭意改善に努めたる結果優秀の成績を收

めてゐる。

昭和八年度公學費は五百八十七萬圓で縣市町村歳出総額の四割を占む。

初等教育 正教員の充實並に素質の向上を期すると共に、兒童就學に意を用ひ、就學奬勵金を交付して貧困兒童には學用品を給し、或は乳幼兒收容所を設けて子守兒童の教育を全ふする等各種の施設を行つてゐる。昭和九年度に於ける兒童數は十二萬一千人で就學歩合は年と共に向上し九九、六五を示すに至つた。

中等教育 時勢の進運に伴ひ、內容を充實し思想の善導に留意し、質實剛健の美風を養ひ、特に實業教育に就ては實際に即し將來國民の中堅として之れが指導者たるの素質を養ふことにつとめてゐるが、一面向學心の旺盛なるに伴つて中等學校の增設、擴張に努めたる結果、學校數三十五校に及び從前の如く入學難を見ることはなくなつた。

補習教育 補習教育に就ては規定及施設要項を制定し、地方の實情に應じた職業訓練に留意し、團体觀念國民精神の作興に努め、規律節制を重んじ、潑溂たる青年を養ふに努めつゝある。目下學校數百四十九校を有す。

社會教育 に關しては各種の講演、講習及印刷物の頒布を行ひ、以て思想の善導と學術技藝の普及に努め、且男女青年團の實地指導に當つては學校教育と相俟つて一般的教育の向上に努めつゝある。

神社及寺院

本縣下の神社數は千八百四十六社。就中別格官幣社佐嘉神社及國幣中社田島神社は縣民の尊崇があつい。

寺院數は千で、內眞宗が最も多く二百八十四、曹洞宗がこれについで二百五十六、以下臨濟宗、淨土宗等がつゞく。

社會事業

方面委員の活動を促すと共に幼老保護、失業救濟、窮民救助、醫藥施療、其の他各種の社會事業の發達助成に勞めつゝある。各種の施設團体數も年々增加し、目下三百四十三團体に達し、その活動も大いに見るべきものがある。

警察

警察署 警察署數は十五、巡査四百五十五人で人口千五百人に對し巡査一人の割合である。

犯罪 昭和九年中の犯罪件數は八千八百件、檢擧一萬件で概して年々增加の傾向にあるが、搜査機關を整備すると共に警察官の訓練に意を用ひつゝある爲、近時檢擧件數は發生件數を超過し、成績良好を示してゐる。

火災及消防組 昭和九年中の火災損害額は二十三萬圓で、毎年多きは六十萬圓少き時も拾萬圓を下

らぬ故に平素防火宣傳につとめ消防組の訓練充實につとめてゐる。消防組數百二十六、人員四萬五千人ポンプ六百八十八臺、內動力ポンプ七十五臺を算する。

衛生

本縣の開業醫師數は四百四十六人、病院三十六で、人口千五百人に對し醫師一人の割合である。衛生思想の普及に就ては夙に意を用ひてゐる結果近時著しく向上した。

急性法定傳染病 年によつて消長があるが平素その豫防、撲滅に努めてゐるのと、衛生思想の發達とによつて、往時の如き慘害を逞ふすることはなくなつたが、腸チブスはまだ縣下各地に發生し、保健上寒心すべきものがあるので之が對策として飲料水の改善、豫防注射の勵行、早期診斷及患者の檢索に勞め極力撲滅に努めてゐる。

人体寄生虫 は他府縣に比して少いと云へないので之れが驅除豫防に努むると共に根本策として便所の改良を奬めつゝある。

トラホーム、花柳病 壯丁檢査の成績によるとまだ良好と謂ふことが出來ない。殊に花柳病に就ては往年寒心すべきものがあつたので之が撲滅を圖るべく接客業者の健康診斷を嚴にし、一面には縣民の自覺を促しつゝある結果近時漸減の傾向にある。

上水道 大正十四年伊萬里町に設置以來佐賀市、武雄町、鹿島町に相次いで給水開始を見るに至り

目下給水戸數九千戸に達してゐるが、平坦地の大部分は今尚河川池濠水を使用するので、改善策として簡易水道又は共同井戸の敷設を奬勵してゐる。

財　政

昭和八年度縣市町村の歳出総額は一千四百三十四萬圓で内縣六百四十一萬圓、市町村七百九十三萬圓である。既往の趨勢を見るに、昭和三年迄は漸増してゐる。これは時勢の進運に伴つて教育の充實警察の整備、産業の啓發等諸種の事業増加があつた爲で、昭和四年度以降に於て稍減少の傾向を示してゐるのは財政緊縮の結果であり、昭和七年度以降に於て増加を示したのは匡救事業等の關係である。歳入総額は一千六百四十五萬圓で内税收入五百六十五萬圓を占め歳入総額の三四%に當る。

縣財政　昭和八年度の歳出総額は六百四十二萬圓で歳出の主なるものは時局匡救費(二七%)教育費(二四%)土木費(一五%)勸業費(一三%)警察費(九%)等である。歳入総額は七百五十二萬圓で内税收入二百五十四萬圓を占め歳入総額の三四%に當り、其他は國庫補助、助成交付金(三四%)縣債、繰越金、使用料、手數料、雜收入等である。

市町村財政　昭和八年度の歳出総額七百九十三萬圓、内教育費三百四十七萬圓で歳出総額の四四%を占め役所役場費(一六%)土木費(一一%)等が之に次ぐ。歳入総額は八百九十三萬圓で内税收入三百十一萬圓を占め歳入総額の三六%に當り、その他は國庫補助下渡金、繰越金、縣土木請負金、寄附金

財産收入等である。

租税負擔額　昭和八年度に於ける

直接國税負擔額	百七十五萬二千三百三十八圓
縣税負擔額	三百五十四萬四千九百四十五圓
市町村税負擔額	三百六萬七千九百七十圓
計	七百三十六万五千二百五十三圓

であつて、現住戸口によつて見ると

一戸當	六拾圓四拾八錢	一人當	拾圓七拾五錢

を示してゐる。

縣富　本縣縣富を貸幣價値に依り推計したる額總は八億九千七百八拾四万圓にして縣民一戸當七千二百九拾三圓、一人當千二百九拾八圓となる。

縣民所得　縣民の生産的方面と消費的方面との兩方面より各推計し之を平均して得たる縣民所得總額は一億一千八百二拾九万八千圓で縣富に對する割合は一割三分に當り縣民一戸當九百二拾五圓、一人當百拾一圓の所得となる。

（四）遊覽案內

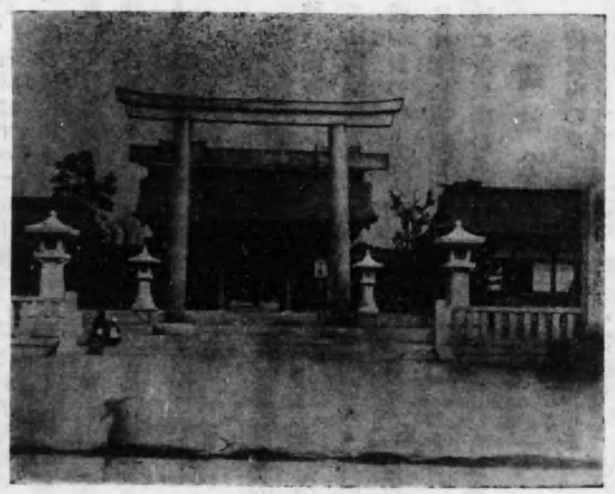
1 佐賀市を中心として

佐賀市

本縣々廳の所在地、鍋島侯三拾六萬石の舊城下である。縣の東南隅に近く茫漠たる筑紫平野の中央に位する人口五萬縣下第一の都市である。舊藩時代以來政治、教育、經濟の中心地であつて、縣廳、地方裁判所、郵便局、測候所、營林署、市役所、高等學校等がある。

本市は明治維新に於ける雄藩の舊城下であるだけにその史跡を探るならば、いふに維新史を繙くの感があるであらう。江川英龍が菲山に築いた大反射爐に範を垂れたといふ筑地大砲鑄造場址、品川砲臺に据付られた大砲を鑄造した多布施反射爐址、化學試驗所といふべき精煉所址、さては天明から明治初年まで八十餘年間維新前後に於ける佐賀藩文化の淵叢となつた弘道館址もある。こゝから大隈重信、副島種臣、佐野常民、大木喬任、江藤新平等維新の大業を翼贊し、或は帝國海軍の基礎を固うした幾多の名士が生れたのである。

觀光地としては佐嘉神社、佐賀城址、神野公園、大隈公園、高傳寺等がある。



佐嘉神社

佐嘉神社

市內松原町にある。昭和八年藩主鍋島氏の祖先代々を祭れる松原神社より閑叟公を招じて新に別格官幣社となつたもので、地も松原神社神苑と、閑叟公銅像園との間にあり、社殿壯麗を極め境內廣く、附近一休漫步杖を運んでよく、夏の夜は涼を追ふて集ふ者が多い。

佐賀城址

市の東南部、赤松町にある。城の別名を榮城といひ又亀甲城、赤松城ともいふ。舊佐賀藩三十六萬石の領主鍋島氏代々居城の所で、今の舊城內南半部は即ちその址である。はじめ龍造寺氏が居り、後鍋島氏の有に歸し、慶長十八年總普請が落成し天守の石臺の高さ五

丈、石材はすべて川上産で、そこに五層樓の天守閣が聳え頗る雄大なものであつた。後享保、天保と二度の火災にあひ、その都度修覆して明治維新に及んだ。明治七年江藤新平等所謂佐賀の亂を起すにあつて、本丸の一部を殘して悉く燒失し、今は僅かに彈痕点々たる牙城の一部、城門の面影を留むるのみである。周圍一里に及ぶ城濠には蓮多く、毎年花季にはその馥郁たる香氣は城中を蓋ひ、道行く人もふと足を止むるばかりである。

神野公園

市内神野町字西神野にある。舊藩主鍋島閑叟公が保養の別莊として弘化三年建てたもので、公は政務の餘暇を以て屢々此處に優遊した。正門内にある二棟の屋舍は當時の別邸である。藩公の別莊としては質素な方で築造の時は藩士等が各々自己の庭石などを献じ、自ら運搬の勞にも服したといふ。普通神野の御茶屋と稱した。園内には多布施川の清流を引いて池水を湛へ、水清く、砂白く、小高い丘には老松古梅が雅致を添へ、櫻あり、藤あり、菖蒲あり、月に雪に四季をり〳〵の情趣を集めてゐる。殊に近來櫻の名所として知られ池畔の吉野櫻が花の隧道を形成る風情はえもいはれない。

蓮池公園

佐賀市の東一里餘、神埼郡蓮池町にある。寛永十六年佐賀藩の支藩として鍋島直隆この地に封ぜられ爾來明治維新まで、藩主の居館のあつた所で明治十年舊館が火災に罹つたので、村民がその址に山

を築き池を掘つて公園を設けた。平野の間にあつて廣袤一萬坪に達し、園内には櫻樹多く、池畔には鬱蒼たる杉林があり、其他松、梅、藤、芙蓉、秋海裳などを配して四季それ〴〵の趣が深い。

川上の景勝

佐賀市に近い遊覽地として、山水の美を訪なるならば、先づ第一に川上の景勝を擧げねばならぬ。水清き川上川に架した丹塗欄干の川上橋を中心に、川上村と松梅村との一部を抱擁し、山紫水明の景趣を展開する一帶の勝地が即ちそれである。岩を嚙み、岸を洗つて、迸り來つた急流が此の地に入つて忽ちゆるやかな淀みを作り清く靜かに佐賀平野の懷に浸つてゆく。春から夏へ――彩霞点々たる山櫻や淀姫社頭の八重櫻が散つて野趣ゆたかな五月雨の頃も過ぎると、兩岸の木山草山は鏡のやうにすみ切つた水面に日に日に色濃き綠の黛をひたす。眞夏の灼光を浴びて紺碧の淵に泳いだり、舟に棹して山村水郷の雅致を掬するもよい。二里の清流に輕舟を浮べて佐賀市に達することも出來る。中秋氣も爽やかな彼岸頃になると名物の鮎築に落つる香魚の數も多い。肥前風土紀に「郡西有川、名日佐嘉川、年魚有之」とあるのがこの地で、古から鮎の

蓮池公園

名所として知られてゐる。見渡す限り眞白な雪景色も亦頗る雄大で、四季を通じての眺望いづれも佳ならざるはない。殊に夏から秋にかけての山容水態の妙趣はえもいはれぬ眺めである。近來避暑客や一日の清遊を試みる者多く、佐賀市附近唯一の別莊地となつてゐる。佐賀市からは絶えず電車自動車の便があり僅々十五分の行程である。

熊の川溫泉

佐賀市から古湯へ向ふ縣道を川上川に沿ふて上ると川上から一里ばかりで熊の川溫泉に着く。小城郡南山村大字上熊川に屬する四拾戸あまりの小部落で浴場は川上川の清流に沿ふた岸邊にある。湯の原溫泉ともいふ。九大で分析した結果によるとラヂウム、エマナチオン含有量の多いこと全國有數のもので九州地方では冷溫兩種の鑛泉を通じてこの溫泉に匹敵するものはないとのことである。

川上川

古湯溫泉

熊の川溫泉の西北一里餘川上川に沿うた所に古湯溫泉がある。南山村大字古湯で、山間の小邑でゐる。口碑によると遠く孝靈天皇の御代の發見に係るさうであるが、その後埋沒してゐたのを寛政二年稻田某が小田の水道に鶴の遊んでゐるのを見て掘り當てたのが今の古湯溫泉で、之を鶴靈泉とよんでゐる。古湯溫泉はかうした物語にふさはしい清淨粗野な山の湯で、脂粉の香たゞやう俗惡な湯町情調などは微塵もない。こんもり繁つた山や幾條となく軟かな襞の流れた草山に圍まれて盛夏九十度を越えず嚴冬四十度を降らぬといふ神仙鄉である。澄み切つた清らかな水は滾々としてそこゝに流れてゐる。湯治客は年數萬に達するといふ。陸軍の指定轉地療養所である。

基肄城址

三養基郡基山村と福岡縣筑紫、山口兩村とに跨る基山の頂上にある。今を去る千二百六十有餘年前天智天皇四年に筑前大野城と共に築かれたもので、國防の爲に築かれた日本最古の城である。所謂朝鮮式土城であつて、今尙周圍に巧みに地形を應用して蜿蜒約四十五町に亘る土壘の址を遺してゐる。山の東南字城戸から登ると丸林口に俗に筒の壇井と稱する雄大なる水門がある。左右の石垣は高四間一尺、厚五間一尺長約十四間半殆ど完全に殘つてゐる。こゝから土壘に沿ふて右に登ると間もなく頂上で、標高四百尺餘大土工の跡が歷然と殘つてゐる。中に屹立してゐる巨巖を俗にタマタマ石といふ山は一面の草原で、北に遠く玄海を望み南に筑紫の大平野を見下し、大野城や水城の長堤と相對して築かれた規模壯大な城砦は千二百餘年前に於ける國防設備の盛觀を偲ばしめる。往昔筑後、肥前から筑前太宰府に通ずる要路に當つてゐて、萬葉歌人にも歌はれた山である。

今よりは城の山路はさぶしけむ
　吾が通はんと思ひしものを

日の隈山

神埼郡西郷村にある。最寄驛は長崎本線神埼驛で、自動車で二十分ばかり。昔烽火が置かれた所で、山容秀麗、西郷富士の名がある。西南麓の日ノ尺ノ池と相對して四季の眺に富んでゐる。昔から日の隈、茶臼隈、早稲隈、雄隈、中の隈、鈴隈、西日の隈を七隈と稱へ、景勝の地として知られてゐた。郡内小學校の聯合運動會も毎年こゝで催され、各中小學校の遠足地となつてゐる。

多久聖廟

多久聖廟

小城郡多久村字東原、椎原山の西麓にある。唐津線多久驛から約一里。舊多久邑主で佐賀藩の國老であつた多久茂文の創設である。初め茂文聖廟建設を志して本藩に願

うた時、本藩ではその例がないので幕府に伺うた所將軍綱吉大いに之れを嘉し、先づ湯島大成殿を建て、佐賀本藩でも之に倣うて聖廟を設け、然る後に多久聖廟の建設を許したといふことである。即ち日本に於ける聖廟建設計畫の始めで、現に唯一の歴史ある聖廟である。今に毎年春秋釋菜を執行し、多久、東多久、西多久、南多久、北多久五ヶ村小學校長も祭官を勤むる慣例になつてゐる。

櫻岡公園

小城町の西南部にある。全園殆ど櫻樹を以て充ち、花時には白雲一天に漲るが如くその眺は名狀しがたい。元和中藩主鍋島元茂こゝに櫻樹を植えしにはじまり、由來、文人儒者の記を作つて之を讃ふるものあつて、ついに、靈元天皇御宇叡聞に達し、新院後西院上皇親しく御製を賜ひ、二品親王以下月郷雲客「詠岡花」の和歌を詠じて之に奉加した。縣下で最も古く且つ由緒ある公園である。

丘の頂上に後西院天皇の御製

詠岡花

さく花にまじる岡邊の松の葉は
　いつとなくしも色をそへつゝ

の一首を奉錄した石の歌碑がある。

清水瀧

牛尾梅林

小城郡小城町にある。最寄驛は長崎本線牛津驛、驛から西北へ約一里。牛尾山一帶數萬株の梅樹枝を連ね、晩冬首春の花時には芳香馥郁滿園に漂ひ、野趣を帶びた梅名所として遊覽者が多い。

清水の瀧

小城郡小城町大字松尾清水觀世音堂の傍にある。最寄驛は唐津線小城驛、驛から自動車で二十分。清水觀音は桓武天皇御宇、聖命上人が勅命を奉じて比叡山を象つて建立したと傳へてゐる。瀧はその右手谷間にあつて直下二十五丈、珠簾の瀧ともいふ。參詣者絶ゆる時なく、寒中瀧請の行をする者も多い。本堂の境内は土地高燥、南方遙かに雲仙嶽や阿蘇の噴煙を望み眺望甚だ佳である。

2 唐津市を中心として

唐津市

小笠原氏六萬石の舊城下で人口三萬一千。古來唐津物の名を以てきこえた本市は、近時、北九州鐵道によつて福岡方面との連絡至便になつた結果、東松浦の風光の美と史跡をさぐる内外觀光客年を逐ふて增加し、遊覽都市としての名聲をあげつゝある。又本市は北九州第一の良港であり、又、唐津鐵工所をはじめ各種の工場、諸會社があり、産業上に於ても本縣北部の中心をなしてゐる。昭和七年より着手したる唐津港の大修築は滿洲、朝鮮との貿易を益々增進すべく、港灣、産業、觀光の三大持徵を有する地方都市として發展せんとしつゝある。遊覽地として唐津城址、虹の松原等枚擧にいとまがなく松浦灣遊覽はすべて唐津から出發しなければならない。

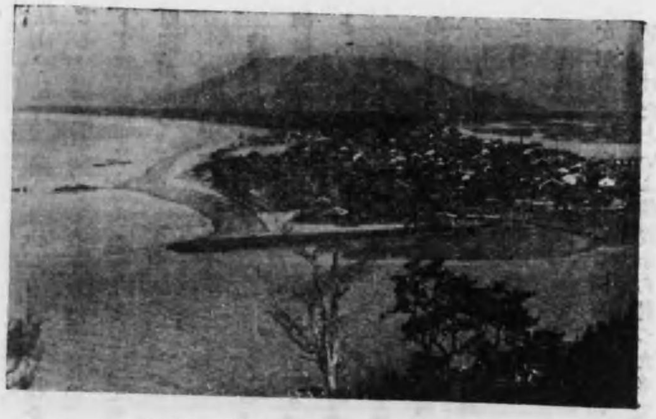
舞鶴公園

小笠原氏六萬石の居城唐津城址一圓を修築しこれに技工を加へ遊園地としたのが舞鶴公園である。海岸に峙つて玄海に面し、右に虹の松原、左に妙見松原　前方灣内に鳥島があつて、その形恰も鶴の頭の如く左右の松原を兩翼にして天空に翔つてゐるやうなので、舞鶴城といひ、今は公園の名となつてゐる。頂上に立つて展望すると、東方遙かに蜿々たる虹の松原の翠綠が、白砂に映ずる里餘の長汀

を隔てゝ全山こんもりと繁つた浮岳を始め肥筑の連山を望み、東南には三百六十間の長橋、松浦橋を超えて千年塚、松浦岩のあたり、河畔の松並木繪よりも美しく流れゆるやかな松浦河口の情景が一望の裡に見渡される。虹の松原の彼方、摺鉢を伏せたやうな草山はこれぞ、松浦佐用姫が戀のロマンスの名に負ひて萬葉歌人らの歌情をそゝつた領巾振山である。振り返つて西の方を眺めると、妙見松原の盡きる邊り、西唐津港の灣内には常に外國船の巨軀を横たへ、大島貯炭場に通ふ貨物列車の煙を吐いて海中の鐵路を走るのも見える。その左手には神功皇后征韓の遺蹟衣干山かおぼろに霞んで見える沖には大島、高島、鳥島等の島々が點在し、遙か、北方に軍艦島とも呼ばれる神集島が泰然と蟠つて玄海の波浪を遮つてゐる。瞳を据えて見詰めると、水煙模糊の間にほの〴〵と一点の白光を認めるは鳥帽子島の燈臺である。虹の松原を中心とした松浦灣一帯の風光は、こゝ舞鶴公園の絶頂から宛然一幅の繪卷物のやうに、雄大また典雅におのづから双眸の裡に繰り擴げられるのである。櫻あり、藤あり、四季いづれも佳ならざるはない。かつて井上圓了博士はこゝに立つて「霓林風光日本一」と激賞した。

西の濱海水浴場

舞鶴公園の下から西に、唐津市の北海岸一帯の海水浴場を、西の濱海水浴場といふ。明治三十七年町營として開設し、脱衣場、淡水井戸、茶店等を設け海中には飛込臺、浮板、棧橋等の設備もあり、



唐津城址より虹の松原及領巾振山を望む

年々改善を加へてゐる。

海は遠淺で水清く、泥土や岩石や海藻などは無く、一面さら〳〵した感觸のいい眞砂で汀の砂も美しい。前には近く鳥島を控へ、左右に高嶋、大島が横たはつて玄海の荒波を防いでゐる。九州屈指の海水浴場である。名勝舊蹟に包まれた天然の美に至つては、けだし、九州第一と稱すべきであらう。七ツ釜、名護屋城址などの勝を探る遊覽船もこゝから出る。

虹の松原

唐津市滿島と、濱崎町との間、松浦潟に沿うた一里十數町に亘る白砂青松の松原がある。虹の松原即ちこれで、松浦潟の濱邊を緣取つた其の形が、ちようど虹のやうなのでこの名がある。一に霓林ともいふ。昔は俗に二里の松原とも呼んでゐた。北は玄海に面し南に領巾振山を控へ、老松幾萬株、亭々天に沖し、蜿蜒地にはらばひ、滴るやうな翠

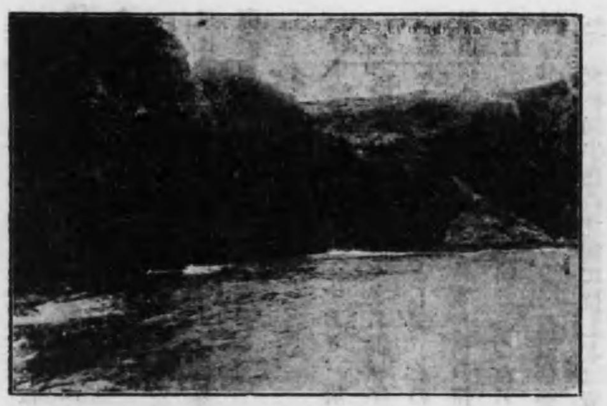
緑は、長汀一路の白砂と相映じ、梢を拂ふ松風は玄海の濤聲に和して、響き妙へなる天然の音樂を奏でる。樹齢が揃うて雄大な点に於いて、全國に其の比を見ない。舞鶴公園や、領巾振山の頂上から見下す絶景はよく筆舌の盡すところでない。今は、其の南線を縫うて北九州鐵道が通じ、中間に虹の松原驛がある。

領巾振山

鏡村と濱崎町とに跨つた山である。往昔、松浦山とも呼び、神功皇后が此の山の頂で御髯を揃へ、御鏡を納め給うたといふ故事に因んで鏡山と稱し、又玲瓏秀麗で四方から見ても、其の形が變らないといふので七面山ともいつた。今は普通鏡山と呼んでゐる。

宣化天皇二年丁巳十月、大伴狭手彦が、新羅征討の勅を奉じて、松浦潟から船出した時、篠原長者の娘佐用姫が別れを惜み、戀々の情切なるまゝに、此山の顚に馳せ登つて、領巾を振りながら、沖行く船を麾いたといふ傳説は、肥前風土記、萬葉集をはじめ諸書に記され、今猶情緒ゆたかな物語として傳へられてゐる。

山は圓錐狀の草山で、容姿優艶、眺望絶佳、頂上に平地があり、その中央部に池がある。昔、穗猪女が池といつて、ここにも佐用姫の傳説を止めてゐる。頂上北端に「袖掛の松」がある。佐用姫が袖を掛けたといふ傳説から起つた名で、玄海の航海者はこれを目標として貴重してゐる。「大日本老樹名木誌」所載の名木である。



七ッ釜

頂上に稲荷神社を祀り、毎年二月初午には近郷から參詣する者多く、此地方に於ける早春行事の隨一である。又、近年夏期の避暑地として知られ、自動車にて頂上に達することも出來る。近く公園として、種々の設備を施し一層遊覧地としての面目をあげんとしてゐる。

七ツ釜

湊村大字屋形石宇神埼の海岸にある奇勝で內務省指定の天然記念物である。一帶を土器崎といふ。全巖玄武岩から成り岩は柱狀節理や板狀節理を呈し、疊々相倚り、累々相迫つて壯觀云ふばかりなく、海に沿うた巖脚に七つの海蝕洞があつて、竈を並べたやうに列つてゐる。これ、七つ釜の名のある所以で、中央のが一番大きく洞窟の幅一間半高さ一間半あり、西端のは石門になつて貫通してゐる。柱狀節理の岩は上と下とその形が違つて、下半は横徑一尺位で

規則正しく併立してゐるが、上半は斜になつたり倒れたりして交錯してゐる。この洞窟は玄海灘の怒濤が縦横の節理に沿うて浸撃したためにおのづから生じたもので、その現象が珍らしいので記念物になつたといふことである。

激浪怒濤巌を打つて白玉を砕くの壯觀は、遠く海上から眺められるが、波の靜かな時は、大きな洞には船を入れることが出來る。神鑿鬼刻、實に造化の妙を極めた天下の奇勝である。唐津市から三里海陸何れからも遊覧の便がある。

名護屋城址

呼子港から便船が絶えずあり、唐津市からは定期の自動車がある。

名護屋村の中央部、大字名護屋字大久保、勝雄ヶ嶽（一名垣副山）の頂上にあつて、豊臣秀吉朝鮮の役に本營を築いた所として、その名普く天下に知れ渡つてゐる。天正十九年から翌文祿元年春迄に黑田、小西、加藤、鍋島等九州の諸將に命じて築かせ、秀吉は文祿元年四月二十五日着陣した。此の地は、鎌倉時代から地頭であつた名護屋肥前守經基の子孫が代々居城した所で、第十代名護屋越前守經述が豊公に献じたので、擴張修築して征韓の本營としたものである。それまでは垣副城といつてゐた。東松浦半島の北端に位し北は壹岐對島を隔てて遙かに朝鮮に對してゐる。

城廓の結構は本丸、天守臺、一の丸、二の丸、山里丸その他十四曲輪があり、出口五ヶ所で、城廓

名護屋城址

の周圍約十五町に達してゐた。

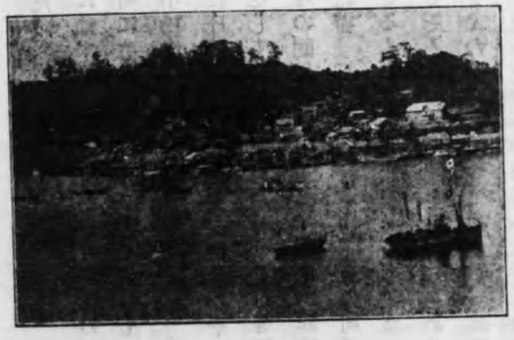
本城を圍んで二三里の間には、諸候の陣營があり、竹の丸に江戸大納言德川家康、筑前町には攝大納言前田利家、かんじやくには越後宰相上杉景勝、小松には福島左衛門大夫正則、太平には加藤主計頭清正、高嶽には鍋島加賀守直茂といつたやうにそれ〴〵百餘ヶ所の陣營に屯してゐた。今尙本城やこれ等諸陣營の跡には、小高い丘や畑地の間に礎石、土壘、石垣、旗竿石等が殘つて、地名にも武器乾場、石屋町、材木町、魚の町、水の手など往時の面影を偲ばせるものがあり、離々たる雜草の下に轉がる石塊の一つにも、そぞろに懐古の眼をみはらしめる。

本丸天守臺には、ありしまゝの礎石が殘つてゐるが、此處に立つて眺めると、北西一望、漫々たる蒼海で、小川島、加部島加唐島、松島、馬渡島等を隔てて遠く壹岐、對島を望み、東に神集嶋から筑前の連山を眺め、西南には大島をはじめ平戸の島々が霞んで見える。快晴の日、極く稀れに對島の彼方朝鮮らしい島影をおぼろに認めることもあるといふ。

城址に登るには、北の門から三の丸の一部に出で德川、小西、前田等の陣營址を眺めながら大手口に至り、こゝから南方外廓の下に通つて二の丸に出で馬乘馬場を經て三の丸に廻り、南門から本丸の方に上るのが一番よい。大正十五年八月三十日、高松宮殿下には聯合艦隊演習のため唐津御入港の御序でに、名護屋城址に成らせられ、この順路を通つて御興深く展望あらせられ、南門上り口の淨地に小松を御手植ゑ遊ばされた。城址山里丸の一端に廣澤寺があり、境内に一株の大蘇鐵がある。加藤清正が朝鮮から持ちかへつて豊公に獻上した由緒のもので、大正十三年天然記念物に指定された。傍に芭翁の句碑があり、古池やの句が刻んである。

呼子港

唐津市から西北三里餘を隔ててゐて、東松浦半島隨一の港である。「よぶこ」と訓む。支那圖書編に、肥前州雄姿哥とあるのはこの呼子港の事で、國花萬葉記に呼名の浦とあるのも是れである。古來良港として知られ、海外航海の要衝に當つてゐる。南北朝時代に九州探題今川了後の弟仲秋が兵船を率ゐて肥前に進入すべく



呼子港

魚具共同蓄養場

上陸したのも此の地であつた。日本汐路記、海路記江風帆草、名所小鏡、海東諸國記等にも呼子の名が記され海路記には

松浦呼子は日本第一の湊なり、上下の舟東西の風に出帆するに何れの湊よりも勝れたり。云々

とある。人口七千、漁業が盛んで秋冬の交には鯨もよく捕れる。水郷情調の濃やかな港で、船舶の出入多く、壹岐通ひの定船もある。鯨の軟骨を粕漬にした名産「松浦漬」を產する。

田島神社

國幣中社。祭神田心姫命、市杵島姫命、湍津姫命相殿大山祇神、稚武王。呼子町加部島の東北端にある。古へから肥前國第一の大社として崇敬された社である。今を去る千二百年前、聖武天皇御宇天平三年の建立で、社記に天平十年大伴古麿を勅使として

田島大明神の神號を贈らせ給ふた事が記されてゐる。石華表の社號額は一品有栖川宮幟仁親王の御揮毫である。境内面積一萬二千九百餘坪、背後の宮山にこんもりと繁つた老松古杉の綠永しへに濃く、前に藍碧の海を控へた神域は、一入の清淨さを覺えしめる。例祭九月十六日。境内に松浦佐用姫を祀つた末社佐與姫神社があつて「効忠貞之節」の扁額が掲げられ、社殿の下には出征の夫を慕うて石に化したと傳へらるる望夫石を安置してあり近くに魚具共同蓄養場がある。呼子から隨時便船がある。参拜後生洲におどる魚の料理に舌づゝみうつも格別である。

假屋灣

値賀村大字假屋にある。佐賀縣の西北方、伊萬里灣と相對して入野半島を抱擁し、値賀、有浦、入野各村の地先に當つてゐる。周圍四里、東西三海里、南北二海里、水深は十餘尋から二十餘尋位で優に大艦を容れることが出來る。海底はなだらかで一つの暗礁もなく、水面常に鏡のやうにおだやかである。天然の良港灣で、嘗て軍水路部長肝付中將をして舞鶴に次ぐの良港であると嘆賞せしめたことがある。灣頭に小島があつて、三島といひ、三島神社を祀つてある。灣内頗る風光に富んでゐる。韓人柳紀淵の假屋灣八勝の七絶がある。

唐津市から定期の自動車が出る。

3 武雄町を中心として

武雄温泉

名もゆかしい蓬萊山下に滾々として湧き出づる千古の靈泉——それは昔、日毎に汀に降り立つ白雲を追ふて川を遡つた一人の翁の發見したと傳ふる武雄温泉である。

佐賀縣の温泉として全國的に知られてゐるのは武雄と後述する嬉野の二つである。本町は人口壹萬温泉街としてのみでなく、その環境の秀麗なることに於て一度は遊ぶべき所である。しかも汽車・バス等發達し交通至便である。長崎へ三時間、佐世保へ一時間、福岡へ二時間、佐賀へ五十分。主なる名所として、櫻山公園、御船山の秀峯等があり湯治旁々遊覽によく街衢整然たるところ、旅館約八十軒。

武雄温泉

櫻山公園

武雄温泉場の背後、蓬萊山を中心とした高地一帶を稱して櫻山公園といふ。蓬萊山は一に白龍峯の稱

がある。天然の奇巖を背景として巧みに人口を施し半腹に櫻や桃や躑躅、楓等を植えて四季の景趣を添へてゐる。溫泉に一浴してのんびりとした氣持でこの園内を逍遙すると、氣いよ〳〵爽やかに、身仙境に在るの思ひがする。

御船山

武雄から南十五町。疊々たる奇岩、怪石から成つてゐて鳥帽子の形をし、蓬萊山と相對して劍を磨いたやうにすつくと天に冲してゐる。昔、神功皇后御征韓の際、御船を此處に繫がれたので、御船山と呼んだと傳へられる。全山火山岩で、孤峰相擁し危巖互ひに迫り、その間に松や杉がこんもりと茂つてゐる樣はさながら一幅の南畫である。その絶勝は鐵道佐世保線の車窓から目前に眺められ、細雨蕭々として薄霧微かにたなびく雨中の景は、えもいはれぬ情趣を見せる。

黒髪山

住吉村の西北部にあつて西松浦郡有田町に境してゐる。

海拔二千百六十五尺、全山鬱蒼と樹木が茂つて、ちようど黒髪のやうな翠綠を湛へてゐるのでこの名があるといふ。伊邪那岐尊が黃泉の國から逃げ歸られる時に、投げられた黑髮御が肥の國黑髪山となつたといふ神話や、弘法大師渡唐の途次この山に登つて祈願し、黑髪を窟内に納めたとかさま〴〵な傳說が殘つてゐて、昔から名山とされた山である。頂上に黑髪神社がある。

黑髪山（雄岩雌岩附近）

全山奇勝佳景に富み、天童岩、雄岩雌岩、龍門、月輪峰、見歸峠、大造落、目一つ坊、乳待坊、重岩などをはじめ、到る處に奇岩絶崖の勝、深谷幽溪の妙境が点在してゐる。裏登山道に當つて、巨巖疊々、嶄壁を削ると見れば、下には岩を嚙んで流れる溪流が所々に碧潭を湛ふるあり、これ肥前耶馬溪の絶勝である。

又この山は珍植物を以て知られカネコシダ、イハゼキショウ、カギカヅラ等の特殊植物をはじめ集塊岩上には高原植物の群落があつて、さながら自然の一大植物園を形成し、花期には文字通り百花繚亂の美觀を呈する。

武雄から自動車を驅つて一日の淸遊によい。最寄驛は佐世保線三間坂驛又は有田驛。

有田町

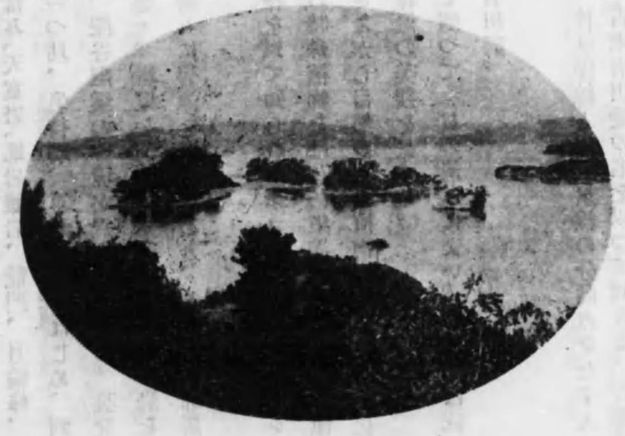
西松浦郡の南部、佐世保線と伊萬里線の分岐点をなす人口七千の都邑である。古來有田燒の名を以つて知らる。香蘭社

カマ堀

工場、深川製磁工場をはじめ、多くの陶磁器工場があるる。

伊萬里町

西松浦第一の名邑人口八千五百、古來陶磁器輸出港としてきこえ、爲に有田燒も伊萬里燒と稱せらるゝ程であつた。伊萬里灣は玄海灘の海水が深く灣入した所で、所謂松浦四郡中第一の良港である。灣内は鷹島、青島によつて玄海の激しい風波を遮り、波靜かで、灣内小島多く景勝地としてもその名が高い。佐世保線と有田でわかれ十分。勿論自動車の便もある。



七ツ島

最近北九州鐵道の開通を見、唐津、博多方面との連絡至便になつた。

七つ島

波靜かな灣内に十幾つの小島が、馬が驅けたり、牛が臥せつたりした樣な形に、此處彼處に点々と浮き上り全島青々と生ひ茂つた老松稚松はひよろ〳〵と空に伸び上つたりうねるやうに懸崖に垂れ下つたりして青疊のやうな海水とその翠綠を競うてゐる。岩高く砂白く風光甚だ絶佳で、伊萬里松島の稱がある。潮干狩にもよい。

嬉野溫泉

武雄から西南へ三里餘、こゝから東へ四里鹿島町、鹿島町から武雄へ四里、三角形を畫くこの三町間に絶えず自動車の往復があり、交通至便である。

嬉野溫泉は日本百景の一、その名も嬉野川に沿ひ、瀧と流れる溫泉の豐富は驚くばかりである。山青く、水清く氣

嬉野溫泉

持のよい溫泉宿で、木の芽香る五月の頃は、茶摘唄の聲も流れて茶所溫泉のゆかしさを見せる。附近の山に川に嬉野八景の名勝もある。

鹿島町

鹿島藩五萬石の舊城下、藤津郡第一の都邑である。人口七千六百。

名所として、旭ヶ岡公園、松蔭神社あり、又近くに祐德稻荷がある。

旭ヶ岡公園

一に松蔭公園ともいふ。櫻の名所としてその名最も高い。舊藩主鍋島直彬、士民の勤勞を犒ふために、居館の一角に亭を築き、その附近の地を拓いて櫻樹を植え、亭を衆樂亭、園を衆樂園と稱した。爾來毎年花時には園内に士民の老若男女を集めて花見の宴を開き公は自ら杯を擧げて詩を賦して士民と共に樂しんだ。名付けて衆樂の宴といふ。之れが記は今に石に刻んで園内にある。明治四年廢藩と共にこの衆樂の宴は止んだが、直彬は更に明治十六年吉野櫻一千株を求めて舊城の内外に植えた。これ今日九州第一を誇る鹿島の櫻の起原で、近年更にしば〳〵補植してゐる。土地高燥、東北有明海を隔てゝ肥筑の連山に對し、東南には多良嶽、經ヶ嶽の峻峰を望んで眺望絶佳である。

祐德稻荷神社

祐德稻荷

古枝村にあり、長崎本線鹿島、濱兩驛から僅々自動車で十分の行程である。佐賀、武雄からも絶えず自動車の便がある。祭神は倉稻魂神、太宮賣神、猿田彦神。古來鍋島家の尊信厚く靈驗著しい神社として士民崇敬の的となつてゐた。今も俗に「祐德院さん」と稱し、遠近の參詣者絶ゆることなく、賽者の數太宰府神社に次ぐといはれてゐる。近時社殿の大修築を施し、山腹の岩を穿つて美麗なる社殿廻廊あり、九州日光の稱がある。

多良嶽

縣の南端、長崎縣と堺する高さ九百八十三米の山を多良嶽といふが經ヶ嶽等の連峰を總稱して多良嶽といつてゐる。火山であるが活動を中止してから多くの年月を經過し、今はその原型を止めない。秋には滿山の落樹葉悉く紅葉して、黄紅圓緒、色とりどりの錦繡を織り出して美觀えもいはれない。

初夏の新綠に交じる石楠花もいゝ。頂上には多良嶽權現の小祠がある。五十猛命、大屋津比賣命、孤津

比賣命の兄妹三柱の神を祀り、和銅年中の創立と傳へられる。並び立つた國見嶽は、景行天皇巡幸の時、こゝに登つて四方をみそなはした所と口碑に傳へてゐる。登山するには長崎本線濱驛で下車し、麓まで自動車で行くがよい。

昭和十一年四月二十日印刷
昭和十一年四月二十五日發行

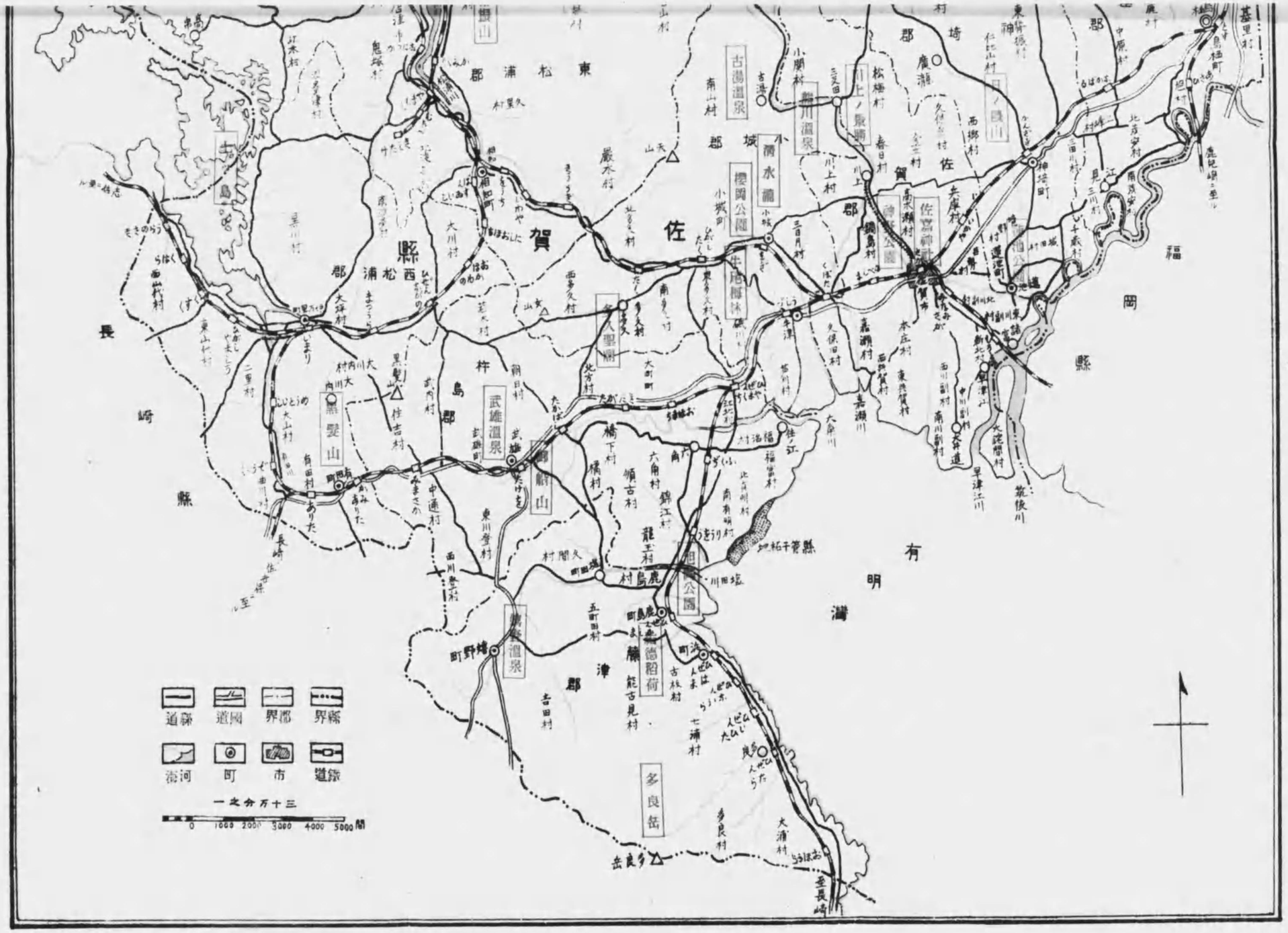
印刷所　佐賀市松原町通り小路二一　一誠社

印刷者　佐賀市松原町通り小路二一　原健作　電話六二七番

佐賀縣總務部統計課

佐賀縣管内全圖

七ツ釜
虹ノ松原
唐津
浜崎
呼子
鬼塚
古湯温泉
嬉野温泉
櫻岡公園
武雄温泉
川上ノ景勝
日ノ隈山
佐賀
福岡縣
長崎縣
東松浦郡
西松浦郡
佐賀郡
三養基郡
基肄城址


佐賀縣
長崎縣
有明灣
福岡縣
東松浦郡
西松浦郡
杵島郡
佐賀郡
小城郡
藤津郡
古湯温泉
嬉野温泉
武雄温泉
多良岳
櫻岡公園
牛尾梅林
佐賀神社
鹿島公園
黒髪山
鹿島
道路
鐵道
界縣
界郡
國道
河海
町
市
一之分万十三
0 1000 2000 3000 4000 5000 間

終